巻頭言

濱 井 武

(元・光文社編集部)

『浅見光彦と七人の探偵たち』は、一風変わったアンソロジー(傑作選集)といえるだ

短編選集というのが一般である。 値基準に合わせて、すでに発表されている作品群の中から選び出した、何らかの統一感のある ふつう私たちが手にするアンソロジーといえば、優れた眼を持った編纂者が、自分なりの価

たとえば、日本における鉄道ミステリーの草分けであり、世に知られず埋もれている作品を

私も現役の編集者だったころ、けっこういろいろなアンソロジーを編む手伝いをした経験が

喜劇』を脱稿した直後の大西巨人氏が、一転して掌編小説秀作選というショートショート集を 発掘することに情熱を傾けた鮎川哲也氏による鉄道ミステリー傑作選とか、長大な小説 一神聖

編んでみたり、またブラック・ユーモア小説というジャンルを世に広めた阿刀田高氏が選んだ

i

ブラック・ユーモア傑作選など、いま思い出しても楽しい作業であった。

眼が及んだものかと、出久根氏ならではの見識と博識に酔ったものである。 私が関わったものではないが、出久根達郎編『むかしの汽車旅』など、 よくもまあここまで

また、編集部と作家集団とが組んで、それぞれ編纂委員を出し合って作ることも多い。

ミステリーなら日本推理作家協会編とか、一般小説を揃えたものでは日本ペンクラブ編とか、

時代小説なら新鷹会(長谷川伸の会)編などというのがあった。

ところが、本書の成り立ちと性格は、いま例にあげたアンソロジーとは、全く異っている。

ここに収められた作家たちは、内田康夫氏を除く七人全員が、毎年東京都の北区が主催する

「内田康夫ミステリー文学賞」の受賞者たちなのである。

たのが、このアンソロジーが作られる発端であった。 け継いだともいえる七人が、自分たちで何かおもしろいことができないだろうか、と思いつい 内田康夫の名を冠した文学賞に応募して受賞した、いわば内田康夫という作家のDNAを受

仲間同士の眼が選考の基準となった。 わば作者自身が、共同の編纂者なのである。自分たちの作品を自分たちで選ぶのだから、

ミステリーの短編という大ワクに収まりさえすれば、細かい制約はない。ユーモア・ミステ 本格風あり、最後の一行に賭けるどんでん返しあり、 とバラエティに富んでいて楽

そしてもちろん、真打となる内田作品には、ぜひとも入ってもらわなければならない。でき

れば北区とも縁の深い名探偵浅見光彦が登場する短編がほしい。

――。内田さんは人も知る長編作家である。短編はきわめて少ない。その中でも浅

今回、その中から「地下鉄の鏡」を収録することができた。これは「週刊小説」(実業之日

見光彦ものとなると、たった五編しかない。

たら中編とか一挙掲載とか謳い文句がつくはずだ。 本社)に書かれた、四百字原稿用紙で百枚を超える短編小説の大作(?)である。小説誌だっ

の作品を提供するための条件は一つだけ。編集者の眼がしっかり届く活字の書籍からスタート 自分の名を冠した文学賞の受賞作家が活躍するのを見るのは嬉しいという内田さんが、自分

してほしい、ということだった。

初めに話がもち上ったころから勘定すると、ずいぶん時間がかかってしまったが、ようやく そして、こうした経緯を聞いて「おもしろい」と乗り出してくれたのが論創社であった。

浅見光彦以下都合八人の探偵たちを乗せたミステリアスな船が、いま出帆することとなった。 私の限られた経験から言わせてもらえば、アンソロジーは、さまざまな可能性を秘めた書籍

が読書の世界に、新しい風を吹き込んでくれることを願いたい。 といえる。この一冊から思いがけない展開があったり、新しい芽が生まれることもある。本書

(はまい・たけし)

家庭狂師 〜名探偵 郁子さん①〜 高橋 正樹	徘徊探偵 ギター男の憂鬱岩間 光介	ホタル探偵の京都はみだし事件簿 ~境界鳥~山木 美 里	満ち足りた終焉	星降る夜、アルル 織江耕太郎	巻頭言/濱井 武 i
179	147	105	59	1	

地下鉄の鏡	梅雨に降る生徒たち	ブラインド探偵・曲げない決意**
内 ^う 5 田 [*] * 康*†	:: 立た たち ぎ けゅうはち 八はち	: 米a 田だ
夫ぉ	八ち	京,

地下鉄の鏡

田だ 康** 夫*

内ち

【プロフィール】

一九三四年十一月十五日、東京都北区生まれ。軽井沢在住。コピーライター、テレビCM

制作会社経営を経て、一九八〇年に『死者の木霊』でデビュー。「第十一回 日本ミステリ

る作品は一一六事件を数える。二〇一六年、軽井沢に「浅見光彦記念館」をオープンした。 した『孤道』で一六三冊。二〇〇七年に著作累計部数が一億冊を突破。浅見光彦が登場す

「浅見光彦シリーズ」はドラマ・映画・漫画化をされている。著作数は、未完のまま発表 ―文学大賞」を受賞。旅情ミステリー作家の代表的人物として知られる。代表作である

西へ、四谷、新宿を通り、笹塚、 ここ二十年足らずのあいだに、新宿以西、高井戸付近までの街道沿いの風景は、それ以前と一変 国道二○号線にあたる、通称「甲州街道」の起点は、皇居のお堀端・半蔵門前である。そこから 調布、 府中、立川と、その辺りまではほぼ真西へ一直線に進む。

真中を首都高速の高架線が走る。歩道を歩いていて空を見ようとすると、ひと苦労だ。まさに、東 かつての素朴な住宅や、ちっぽけな商店に代わって、周辺にはマンションが建ち並び、道路のど

――のである。

とりわけ、初台から笹塚辺りまでは、高架道でふたをされたような具合だから、ビルの谷間のよ 表通りに面したところでは、終日、高速道路と下の国道を走る車の騒音に悩まされる。

うな街道には、自動車の排気がこもってしまう。生活環境がいいとはお世辞にも言えない。

その夜、浅見光彦は京王線の幡ケ谷駅で降りて、甲州街道を笹塚方面へ向かって歩いていた。

したがって、幡ケ谷駅では地下鉄と同様、階段を上がって外へ出る。 京王線は笹塚と幡ケ谷の中間で地下に潜り、新宿駅で都営地下鉄との相互乗り入れになっている。

出たとたん、ウオーンという騒音が押し寄せてきた。騒音の基準をいう時、よく、地下鉄なみ

もっとも、道路に面したところでなければ、この辺りは住環境として申し分ない。騒音も排気ガ などというけれど、ここのはそれに近い。 301

スも表通りのマンションや商店が犠牲になって、全部引き受けてくれるというわけだ。

ある雑誌の編集長の家がこの先を少し行って、右に入ったところにある。そこで今夜、新しい企

画の打ち合わせかたがた、新年会めいたことをやろうということになっていた。

夜に入って気温が下がり、雪もよいだというのに、街はまだ、お屠蘇気分の抜けきらない人々で

に気をつけながら、人の往来を縫うようにして歩いて行った。 店先にはみ出した商品や自転車、街路樹、植え込みなどで、ただでさえ狭い歩道だ。浅見は足元

賑わっていた。

いきなり、黒い巨大な塊が十メートルばかり先の植え込みに落ちた。「ドサッ」という鈍い不快

な響きが伝わってきた。寸前に「キャーッ」という悲鳴が降ってきたのも聞いたような気がする。

前方を歩いていた数人の人たちがワッと飛びのいた。

「落ちた」「人間だっ」

が起こったのか、事態をよく把握しているようであった。 浅見の背後から声が上がった。間近にいた者より、少し離れたところからの目撃者のほうが、何

て、彼等に続いた。 ワラワラと駆け寄る野次馬が、浅見を押し除けるようにして、脇を通り抜けた。浅見も一瞬遅れ

道路の端にある植え込みはツツジである。その中に沈み込むように、女が倒れていた。ピクリと

け起こそうとはしない。もっとも、すでに死んでいると思っているせいかもしれない。 野次馬は一、二メートルの距離をおいて彼女を囲み、恐る恐る覗き込む。誰も手を差し延べて助

浅見は人の輪を潜り抜けるようにして、女に近寄った。

不自然な恰好に投げ出された腕を取って、脈を計る。弱々しいけれど、脈はまだ打っていた。

「誰か119番をお願いします」

背後の野次馬を振り返って言った。それに応じて、二人が走り去った。

女の体はほぼ上向きだが、頭部は植え込みの底の地面に叩きつけられた際のショックで首の骨が

「しっかりしなさい」

折れたのか、ねじ曲がった状態になっている。

浅見は尖った枝先で目をつつかれないように注意しながら、女の上に屈み込んで、大声で叫んだ。

ネオンの明かりで、女の苦しそうな表情はかなりはっきりと見える。不規則ながら、呼吸もまだ

(助かるかもしれない――)ある。

浅見は思い、もう一度呼びかけた。

女はふと目を開けた。焦点の定まらない、幼児のような黒い目であった。苦痛が消えたのか、 顔

の筋肉が緩んでいる。

死の兆候だ――と浅見は思った。

女の唇が動いた。

「なんですか?」

浅見はいっそう屈んで、女の口に耳を寄せた。

「……ちかてつのかがみでみた……」

2

救急車はまもなく到着したが、すでに死亡していることを確認して、そのままの状態で警察の検

幡ケ谷駅前派出所の巡査が現場の保存にあたり、目撃者の確保と聞き込みを始めた。

視を待つことになった。

目撃者の中にはもちろん浅見もいる。浅見は編集長の家に電話を入れて、少し遅れる旨を伝えた

が、本心はすでに、会合に出席するつもりがなくなっていた。

た。あとは関わりあいになるのをいやがって、パトカーが到着する頃には、どこかへ消えてしまっ 少なくとも十数人はいるはずの目撃者のうち、現場に残って警察に協力したのは六名だけであっ

てきたということで、それ以外の目撃談は出なかった。 たら、圧迫するような高速道路の広がりだけである。要するに気がついた時には、女が天から降っ を歩くのに、上を見ながらでは危なくてしようがない。第一、空は真っ暗だし、見えるものといっ 目撃者は多いが、女が地上に落下する以前のこととなると、まったく見ていない。混雑した道路

てきて、現場はがぜん慌ただしくなった。 最寄りの代々木警察署からの捜査員と、サツ回りの新聞記者が、合わせて二、三十人あまりやっ

道路の通行を一時ストップさせ、野次馬を遠ざける。鑑識と記者のカメラが競うようにフラッシ

ユを光らせる。

やがて検視と実況検分を済ませ、女の遺体を救急車が運んで行った。

その頃になると、目撃者は浅見ともう一人――二十五、六歳の男を除いてすべて引き上げていた。

浅見もそうだが、もう一人の男もよほどの暇人か、あるいはよほどの物好きにちがいない。 女が「落ちた」場所は『幡ケ谷ダイヤモンドマンション』というたいそうな名前のマンションの

前である。その十二階建のビルは三階までが店舗と事務所、四階と五階が駐車場になっている。女

はどうやら五階の駐車場から転落したらしい。

ど、そうでないと下の駐車場の床か手摺に激突してしまうことになるからだ。さらに二、三メー というのは、それ以上の各階は壁面が約二メートルほど引っ込んでいて、うまく飛べばいいけれ

トルばかり先、道路の端にある植え込みまで飛ぼうとすると、かなりの跳躍力が必要になるだろう。

それを裏付けるように、五階駐車場の手摺の下に、ポシェットが落ちていた。

ないところからの転落であったためと考えることができる。 女が落下してしばらく生きていたのは、運よく植え込みに落ちたことと、五階というあまり高く

数人の刑事が残って、付近の聞き込みに入る様子である。 警察は二人の目撃者にはかまわず、ひととおりの鑑識作業を終えると、引き上げはじめた。

その一部始終を、浅見は見学していた。

げるのと一緒に、どこかへ立ち去った。 もう一人の若い男も興味深そうに眺めていたが、さすがに根が尽きたのか、警察の主力が引き上

野次馬もいなくなり、街はふたたび、いつもどおりの風景に戻ってゆく。

浅見は、ずっと捜査の指揮にあたっていた、 たぶん代々木署の刑事課長と思われる私服 の人物に

近づいた。

「失礼ですが、刑事課長さんですか?」

「ん?!

胡散臭い目で振り返って、「そうですが」と言ってから思い出した。

「ええ、浅見といいます」

「ああ、あんたは目撃者の一人でしたね」

「はあ」 「どうもお世話さま、住所はたしか、お訊きしましたな? だったらもう帰ってもいいのですよ」

浅見は軽く頭を下げてから訊いた。

「これは、自殺でしょうか? それとも他殺でしょうか?」

「は?……」

刑事課長は妙なことを――と言わんばかりの目で浅見を見た。

「それはまだ分かりませんよ。これからいろいろ調べて、結論を出すのです」

なるほど……」

浅見は素人っぽく頷いて、

「じつは、あの女性ですが、息を引き取る直前、 おかしなことを言ったのです」

「 ほ う _

刑事課長ははじめて興味を抱いた顔になって、体ごと浅見のほうに向き直った。